

思い出のブレスレット

翌朝、ロイは村に到着した。アテナは、石の傍らそりの上で眠っていた。

親方が家の戸を開き、村の入り口にいるロイの元に駆け寄ってきた。

「とんでもねえ砂嵐だったもんだから、心配したぞ！」

「すまねえ、親方。砂嵐に巻き込まれた人がいて、助けていたら遅くなって・・・」

「ロイ、着いたの？」

親方がそりから起き上がるアテナをのぞき込んだ。

「こりゃ、おったまげた。ロイが女の子を連れてきたぞ！」

親方が叫ぶと、あっという間に村中の石工職人がロイとアテナを取り囲んだ。

「ほんとだ、かわいい・・・」

「髪の毛が金色だぞ？」

「俺、こんな白い肌みたことない。」

「あ、笑ったぞ。俺に笑ってくれたぞ！」

「あーあーマズい。ダメダメダメ」

ロイが慌てて、手で兄弟子たちを追い払った。

「ははは、こいつ焼きもちやいてやがる。」

親方が腹を抱えて笑った。

「ちがうって！この方は王女様なんだ！ファラオのお妃さまになる方を砂嵐から救ったんだよ！」

親方と職人たちは顔を見合わせると、飛び上がって地面に突っ伏した。

「申し訳ございません、王妃様！この無礼は、何卒良しなに・・・」

「おやめください。私はロイとお友達になったのです。その友人のお仲間、非礼など
ございません。どうか、皆さんお立ちください。」

親方はすっと起き上がると、ロイの肩を抱いて囁いた。

「でかしたロイ、これで当分食っていけるぞ」

「そっちは親方に任せるよ。僕は彼女とは友達でいたいんだ。」

ロイは俯くと答えた。親方は嬉しそうに両手をすり合わせると、職人たちに向き直った。

「よーし、者ども！お妃さまを都まで送り届けるぞ！ロイの友達なんだ、いいな？」

親方がロイとアテナにウィンクすると同時に、職人たちからオー！と掛け声が上がった。

「ニトゥケ、パシェド、お前たちは数人連れてお妃さまの荷物を探しに戻れ。残りの者たちは直ぐに出発だ！」

アテナはロイの引くロバに乗り、ギザの大ピラミッドの前に佇むスフィンクスの前を通り、ナイル川を遡り、空高く石が積み上げられたテーベの門をくぐった。

「まあ！素敵！」

アテナはテーベの街を見て歓声を上げた。

「ちょっと、みていってもいい？」

「もちろん。うわっ！」

ロイが答えると、アテナはロイの手を引き、商店街を巡った。

青果市では西瓜^{すいか}や無花果^{いちじく}、パンは山積み^たにされ、樽で置かれたビールを勧められ飲ん

だアテナは陽気になると「変な顔！」とロイの鼻を指でくすぐってケラケラと笑っ

た。ロイは、アテナの急なアプローチに戸惑い、頭を掻いた。

「いやあ、お嬢ちゃん、美人だね。旅行かい？」

宝石商の店主が金糸で繋いだ8連のビーズのネックレスをアテナに首からかけてくれた。

「どうだい、ばっちりだ！」

「まあ、ありがとう。とっても素敵だわ。」

「ごめん、おやじさん。今はこれしかないんだ・・・」

ロイが店主に貨幣を渡すと、彼はアテナからネックレスを外し、1連のビーズの腕輪を代わりに付けてくれた。

「おまけしとくよ。」

「ごめん・・・」

ロイは俯^{うつむ}いた。

「ううん、ありがとう！とっても嬉しい！お兄様以外に何か買ってもらったことなんてないもの！」

その後、二人は、ルクソール神殿が側に見える宮殿の門で止まった。宮殿の前には天高くそびえるオベリスク、奥の庭に生えたソテツの間では小鳥たちが囀^{さえず}りながら飛び交っている。

「ちゅん！」

アテナのスズメも宮殿の庭へと飛び去った。親方たちも二人の後ろに並び、衛兵に近づいた。

「ギリシアのアテナイの姫君、アテナ様をお連れしました。砂嵐で遭難していた所をせがれがお救いしたのですが、お連れの方々は残念ながら……。王妃様のお荷物は今、仲間たちがお持ちしております。」

親方が頭^{こうべ}を垂れて告げた。

「確認する、しばしまて。」

衛兵は、石畳の先にある真っ暗な宮殿への入口へと姿を消した。宮殿の入口まで朱と青で彩られた大木のような石柱が支える天井には、エジプトの神々が色彩豊かに描かれていた。

「本当にありがとう。」

アテナはロイと親方に向き直った。

「また会いに来てね、きっとよ。」

アテナは満面の笑みでロイに問いかけた。

「ああ・・・きっと・・・」

ロイはやっとの思いで笑みを作るも、眉はさがり、肩を落とした。

「おお、アテナ様！」

大司祭アメンホテプが駆け寄り、アテナにお辞儀をすると、ロイ達に視線を移した。

「ものども、ご苦労であった。下がってよいぞ。」

「あの、褒^{ほう}美^うの方を・・・」

親方が食い下がった。

「おお、そうであった。では、代表の者は私についてくるがよい。」

「またね・・・」

アテナはロイと石工職人の皆に手を振ると、アメンホテプと親方と共に宮殿へと向かった。ロイは、皆がその場から去り、誰もいなくなったその場で、いつまでも立ち尽くした。

魔女の呪い

魔女は、日暮れ前に砂漠の谷に訪れていた。地面には地下へと続く墓標^{ほひょう}がいくつも並び、カラスが叫^{さけ}びながら集まってきた。

魔女は、呪文を唱えながら歌い出した。

- ♪ ようやく、会える愛しい人
- ♪ この日をどれだけ待ったことか
- ♪ こんなにも愛してくれる人がいるなんて
- ♪ 貴方は世界一幸せな人
- ♪ 私と暮らすことがあなたにとっての幸せ
- ♪ だって私ほど貴方を愛せる人は
- ♪ 他にいないのだから！

「さあ、僕^{しもべ}たちよ。我が夫を迎えに行こうぞ・・・」

魔女が両手を天に広げると、身に纏^{まと}った赤いオーラが赤い煙となって、谷中の墓の石棺に吸い込まれていく。

ゴト・・・石棺の蓋が落ち、包帯にくるまれたミイラが次々に目覚めていった。

ミイラたちは、黄金の胸当てと槍を携え、魔女の下に集い、魔女と共に踊り始めた。

魔女は肩をうねらせ、谷の奥にある大きな墓標^{ほひょう}へと向かった。

♪ さあ、お目覚め。

♪ 伝説の剣士ゼム=ゼムよ

♪ 私を王都へ連れて行っておくれ

♪ 私を愛する人の所へ連れて行っておくれ

♪ 私とファラオとお前たちで新しい王国を築くわ

♪ 私達の愛で

♪ お前たちの国を築こう

♪ 闇の国を

♪ 光は要らない、闇の世界を！

魔女が赤い煙で石棺を開けると、雷鳴と共に黒いマントとフードを被ったミイラの巨人が立ち上がった。

唸る巨人のミイラのゼム=ゼムに慄き、赤茶色の小さな蛇、ケセムがその場から逃げ出した。

アテナは、夕食の宴に招かれた。とても長い食卓にファラオと対面で腰掛けると、

アテナは恐る恐る顔を上げてファラオを^{うかが}窺った。

ファラオは、アテナには関心を示さず、^{うつむ}俯いたままゆっくりとスープを口に運んだ。

「これは美しい姫君ですな！」

大司祭アメンホテプは大手を広げて歓迎した。

「喪を明け、早速、婚儀を催しましょう。国民もファラオの即位式を待ちかねております。」

「ああ・・・」

ファラオは小声で呟くと、スプーンをテーブルに置いた。

「余はもう下がる。ギリシアの姫よ、長旅ご苦労であった。ゆっくり休むがよい。」

「すみませぬな。ファラオ様は前妻を亡くした心の傷がまだ癒^いえておらぬのです。」

アメンホテプがアテナに^{ささや}囁き、ファラオを追って席を立った。その時、食堂の外で、調度品や人が倒れる大きな音がした。衝突する金属音の後に、数名の絶叫が広間に届き、耳鳴りがするような^{せいじゃく}静寂が訪れた。

アメンホテプがファラオを下がらせ、真っ暗な食堂のアーチ状の入り口に目を凝らした。すると、その闇の中に無数の緑色の瞳が浮かび、ぎろろぎろろと動き出した。

アテナは息をのんだ。頭に無数のヘビの髪を持つ魔女がゆっくりと姿を現したからだ。彼女に続いてゼム＝ゼムも首をすくめながら部屋に入ってくると、その巨体に皆は

言葉を失った。

「ようやくお目にかかれましたわ、愛しい我が君・・・」

魔女は、スカートの裾^{すそ}を持ち上げ、頭^{こうべ}を垂れると、上目遣い^{うわめづか}でファラオを見た。

「私の名はイルヴァーナ、あなたを愛する者でございますわ。」

イルヴァーナの頭部に住む蛇達が一斉にファラオを見上げた。ファラオは目を丸くして、後ずさりした。

「な、なんとおぞましい姿よ・・・、え、衛兵！」

ファラオは腕を抱えて震え出した。

イルヴァーナは、唇を噛み締め、背筋を伸ばすと彼を正面から睨みつけた。

「なんと仰いました？おぞましいですって？！貴方を…世界の誰よりも愛してくれる、この私を?!」

イルヴァーナはファラオに歩み寄り、鼻先が触れるほどまで顔を近づけて告げた。

ファラオは腰を抜かし、床に尻餅をついた。

「さあ、しのごの言わずに私の神殿にいらっしゃい。ずっとそこで死ぬまで私と愛し合うのです・・・」

イルヴァーナが手を差し伸べると、髪^{かみ}の蛇^{へび}たちがシャーッと唸った。

アテナが、ファラオとイルヴァーナの間に割って入った。

「どけ、小娘・・・」

「嫌です。彼は嫌がっておいでです！」

「ファラオさえ手に入れば、寛大な^{かんだい}私^{わたくし}は・・・貴様を見逃してやろうと思っていたのに・・・どこかぬか！このしぶといゴキブリめ！」

イルヴァーナの手から深紅の稲妻がアテナに向かって放たれた。

「チチチッ」

スズメが何処からともなく現れ、アテナの周りを旋回すると、金色の光が彼女を包んだ。

魔女の放った稲妻は、岩にぶつかる滝の様にアテナの前で金色の光によって受け流された。

「おのれ、このままお前に私のファラオを奪われてなるものか！」

魔女は更に両手で稲妻を押し込むと、アテナを纏っていた黄金の加護を貫き、眩い閃光が部屋を包み込んだ。

「あらあら！なんておぞましい姿なこと！あはははは・・・」

アテナが自分の姿を見ると、真っ白な^{うろこ}鱗に包まれた長い下半身が見えた。テーブルから落ちた水盆の流れ出た水面に、白蛇の姿が写り込んだ。アテナが後ずさりすると、蛇の姿も水面から消えた。

「チチチ・・・」

スズメは悲しげに^{さえず}囀り、宙で羽ばたいた。

「さあ、来るのよ・・・」

イルヴァーナがファラオに手を延ばすと、彼女を纏っていた赤いオーラが揺らぎ始め、その光が弱まっていった。彼女の手の甲の張りはなくなり、ミイラのようにしわ枯れた手になっていった。

「クッ、神殿の外では・・・ここまでか。娘の呪いに力を使いすぎた・・・帰る力は残しておかないと・・・」

イルヴァーナが指をパチンと鳴らすと、ミイラ達は揺らいだ空間に姿を消した。

「あなたが私と来ないというなら、黄泉^{よみ}の国で共に暮らすまで。」

イルヴァーナは両手から紫の霧を出し、ファラオに吹きかけた。

「我が呪いは貴方の命を食らうであろう。この世で生きたいのならば私の神殿において。私と共に生きるというのならば呪いを解いて付き合っ**て**あげる。拒むのなら、黄泉^{よみ}の国で貴方を待つばかりですわ。ホホホホ・・・」

イルヴァーナは高笑いすると姿をくらまし、ファラオは紫の呪いの煙に包まれ、意識を失った。

「ファラオを寝室に！その大蛇は捕らえて牢に入れるのだ！」

アメンホテプがアテナに向き直り、衛兵に告げた。蛇に姿を変えたアテナは、スルスルと壁を上り、天窓から外に抜け出した。

アテナが宮殿の庭を抜けると、ビールを飲んでフラフラ歩いている男に見つかり、

絶叫を上げられた。アテナは慌てて茂みに飛び込み、息を殺した。

「おい、このあたりだ！人を飲み込めるほどでかい蛇がいたんだ！」

男たちが投網^{とあみ}や槍を持ってぞろぞろと現れた。怯えたアテナは、ゆっくりと町を離れ、ナイル川の岸辺に移動した。

アテナは、水面に映った自分の姿を見て、シクシクと泣き始めた。大きな目、頬まで裂けた大きな口、伸びる長い舌、ただひたすらに白い鱗^{うろこ}が月光で輝いていた。街の方から松明の群れが近づいて来るのを見て、アテナはナイル川に滑り込み、対岸に向かって泳ぎ出した。水面にポツポツと波紋が立ち、雨が降り始めた。彼女がスルリと対岸の地面に体を乗上げると、大きな目がパチリと背後の水面で輝いた。

「わあ！」

「きゃあ！」

アテナが飛び下がると、大きなワニが手を胸の前で組んで怯^{おび}えて彼女を見返していた。

「え？蛇？すごい大きいから、怪物かと思ったよ～」

ワニは胸をなでおろし、アテナを見た。

「それにしても綺麗な鱗^{うろこ}だねえ。こんな美しい鱗^{うろこ}は見たことないや。」

ワニは、月光に銀色に輝く真っ白なアテナの鱗^{うろこ}を見てため息をついた。

「え、あ、ありがとう・・・」

アテナは視線を落として戸惑いながら答えた。

「うわぁ～、君、尻尾に素敵な輪っかを付けてるね。」

ワニは、アテナの体の大きさと美しさを調べる様に頭から尾まで眺め、彼女の尻尾に人間の時に身に着けていた金冠とロイから貰ったビーズのブレスレットが通されているのを見つけた。

「そんなの見たことないや。」

「これは人間の装飾品だから・・・、実は私・・・」

アテナはこれまでの^{けいい}経緯をワニに告白した。

「ふうん、じゃあ君は、その魔女の呪いで人間からその姿に変えられたってわけ？」

アテナは^{うなだ}項垂れた。

「もう、戻れないの？」

「分からないの・・・」

「ふうん・・・」

「あの・・・こんな人間を見たことない？」

アテナは尻尾で砂浜にロイの似顔絵を描いた。

「どうしても、一目会っておきたいの・・・」

「わぁ、じょうずだね。うん、知ってるよ。」

「え？本当？！」

「そりゃあ、もう。毎日の様に岸辺でトンカン、石を彫ってるんだもの。あの岸辺はうるさくて眠れないって仲間内じゃ有名さ。」

「案内して貰えますか？」

「うーん、そうだな。その輪っかを一つくれたら・・・」

「金の方で良ければ・・・」

ワニの目がキラキラと輝いた。アテナは、ビーズのブレスレットを一度地面に落とし、金の腕輪を、尻尾からワニの腕に滑り落した。

「ジョニーだ、よろしく。ついておいで。」

ジョニーはザブンと川で身をひるがえし、下流に向かって泳いでいった。

アテナがロイのブレスレットを拾い、彼の後を付いていくのを、黒い幼犬が茂みからじっと眺めていた。